

『天草版平家物語』における副詞の位置

— 添加される副詞を中心に —

中川 祐治

(2001年9月30日受理)

On the function of adverbs used additionally in the "Amakusabanheikemonogatari"

Yuji Nakagawa

The purpose of this paper is to clarify the functions of adverbs used additionally in the "Amakusabanheikemonogatari".

"Amakusabanheikemonogatari" is a Japanese textbook for missionaries written by Fabian in 1592, based on the "Genkyobonheikemonogatari" written in the Kamakura Era.

In this paper, I point out the following points.

(A) There are 119 more adverbs used additionally in the "Amakusabanheikemonogatari" compared to the "Genkyobonheikemonogatari".

(B) These adverbs are classified into three types, the modal adverb, the degree adverb, the state adverb.

(C) Among these three, the modal adverb is the most adverbs used additionally in the "Amakusabanheikemonogatari".

Key Words: modality, a modal adverb, a degree adverb, a state adverb, "Amakusabanheikemonogatari"

キーワード：モダリティ、モダリティの副詞、程度副詞、情態副詞、『天草版平家物語』

1 はじめに

1.1 本稿の目的

本稿は、副詞を視点とするモダリティの変遷を通して日本語構文史を体系的かつ動態的に捉えんとする試みの一つとして、『天草版平家物語』における副詞についてその構文的位置を明らかにすることを目的とする。そのために、原拠本『平家物語』¹との比較を行ない、原拠本『平家物語』には現れず、『天草版平家物語』において新たに添加される副詞についての記述を中心に据え、これを視点として考察をすすめていくものとする。

本論文は、博士課程候補論文を構成する論文の一部として以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：沼本克明（主査）、多和田眞一郎、町博光、松本光隆（文学研究科）

1.2 本稿におけるモダリティ及び副詞の捉え方

本稿では日本語の構文について以下のように捉える。文には、述べる内容としての事態（命題）とそれに対する話し手の捉え方、発話の様式を表す部分（モダリティ）が存する。即ち、文は命題とモダリティから構成される。また、モダリティは、話し手の発話・伝達態度のあり方の部分（聞き手目当てのもの）と、話し手の命題に対する把握の仕方（判断の種類）を表す部分（命題目当てのもの）とに大別される。

本稿で考察の対象とする副詞は、このモダリティの中核成分となるものである。さらに、日本語構文史を紐解くと、副詞の構文上の機能が古代語から近代語へと推移する過程において変化し、より重要性が高まってきたと考えることができる。これらの指摘は、古くは土井（1934）を始め、近時では大野（1993）において以下のごとく認められる。

【土井（1934：p.111）】

「日本語は、中古から近古に入って単純化する傾向を

現出したのである。(中略)さればとて、国語の精密な表現が出来なくなったとのみも断定出来ない。古語の衰退に代る新語の発生、殊には表現形式の変化を考慮に入れねばならない。概して言えば、総合的表現から分析的表現へと推移した。助詞助動詞は減じたけれども、副詞等によって補はれたものが少なくないのである。」

【大野 (1993 : p.350)】

「古典語の体系の中では、助詞や助動詞はそれ自身で多くの複合した意味を一つの単語で担っていた。しかし現代語ではそういう助詞・助動詞の一つ一つが担っていた意味の複合を分解し、別に副詞を加えて表現するに至ったのである。こうした「混沌一分解」という方向は、古典語から近代語への変化の一つの傾向である。近代以後は、副詞を別に加えて表現する傾向が強くなり、係助詞だけで混沌のまま表現するという仕方が少なくなってきた。これが係助詞の衰亡へと一役を担ったといえるように思う。」

従来、日本語構文史は、「係り結びの断続関係が卓越的に表面に出ている時代から論理的格関係が卓越的に表面に出る時代への変遷²」といった観点から捉えられ、その中では、助詞の明示化といった点に特に重点がおかれ研究がすすめられてきた。先の土井と大野の指摘はこの中で副詞に焦点を当てた特筆すべきものであるが、推論的叙述に留まり、具体的な実例に基づく考察はなされていない。本稿の第一の目的は、原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較対照を通して、これを実証的に裏付けるところにある。

ところで、副詞については、一般的に、山田 (1936) に従い、陳述副詞、程度副詞、情態副詞の三つに分類される。本稿も基本的にこれに従うものであるが、陳述副詞については、従来から「呼応」に注目が集まり、「呼応」の有無が陳述副詞か否かの判断の基準となってきた。本稿では、この「呼応」の有無に限らず、話し手の主観を表す副詞として広く捉え、これをモダリティの副詞³と呼称する。これは、従来の「呼応」に着目点の置かれた陳述副詞との混同をさけるためである。従って、モダリティの副詞には呼応制限を持たない、いわゆる註釈副詞(評価副詞)、とりたて副詞も含まれる⁴。

この中で、情態副詞、程度副詞は語の副詞といわれるものである。これらは命題(叙述内容)を詳しくするものであって、命題の情報量の増減に全く関与しないモダリティの副詞とは明確に区分される。しかしながら、程度副詞の一部については話し手の評価性や註

釈性を帯びたものがみられるものもあることから⁵、本稿では、副詞について、情態、程度、モダリティの三種を認め、最も形容詞(形容動詞)に近い性格を有する情態副詞、命題の情報量に全く関与せず、専らモダリティにのみ関与するモダリティの副詞、その両者の性格を有する程度副詞、を連続するものとして捉えることとする⁶。

以下、本稿ではこれに従い考察をすすめるものとする。

1. 3 資料について

本稿では、資料として『天草版平家物語』を用いる。これは、原拠本『平家物語』ともいべきものをもとに、中世末期の口語によって「世話に和らげたる平家の物語」であって、編者ハビヤンによる、言い換え、意識、省筆などが所々みられるものの、原拠本『平家物語』と同一文脈での比較対照が可能であり、約400年間の通時的変遷を捉えることができる資料である。しかも、この400年は日本語が古代語から近代語へと推移するまさに過渡期であって、日本語の構文史を捉える上で極めて重要な時期であり、これらの資料を対照させ考察することは日本語史を考える上で有意義であると考えられる。

1. 4 先行研究について

本稿に関連する先行研究としては、清瀬 (1973) のものがある。そこでは、『天草版平家物語』の本文の特色を明らかにするといった観点から『天草版平家物語』本文における副詞について考察が行なわれ、『天草版平家物語』本文の前半と後半では前半の方がより口語性が強いことが指摘されている⁷。本稿はこれに示唆を受けたものではあるが、清瀬 (1973) のものとは上記の点のようにその目的、観点が異なる。また、清瀬 (1973) では対象となる副詞は僅かに24語しか挙げておらず⁸、本稿のものとはかなりの隔たりがみられるなど、さらに検討すべき余地があると思われる⁹。

本稿では、清瀬 (1973) を土台とし、それらの問題点を補いつつも、それに留まらず、上述の目的に従い、大局的な日本語構文史の流れの中に『天草版平家物語』の副詞の位置付けを図っていきたい。

2 『天草版平家物語』において添加される副詞

以下、『天草版平家物語』において新たに添加される副詞について、情態副詞、程度副詞(時の副詞、量の副詞を含む)、モダリティの副詞、の分類に従い、実際

の用例を挙げる。

2. 1 情態副詞

原拠本『平家物語』には見られず、『天草版平家物語』の同一文脈において新たに添加される情態副詞は、次の12語(ちやうど(1)、こっと(1)、ひたと(1)、そっと(1)、やうやうと(4)、ひよっと(1)、くっと(1)、ちやうちやうど(1)、ぐるりぐるりと(1)、どっと(1)、はらはらと(1)、泣く泣く(1))である。()の数字は用例数。以下同じ)以下、実際の用例を挙げる。

- 1 其上忠盛の郎等、もとは一門たりし木工助平貞光が孫、しんの三郎大夫季房が子、左兵衛尉家貞といふ者ありけり。薄青のかり衣のしたに萌黄威の腹巻をき、弦袋つけたる太刀脇ばさむで、殿上の小庭に畏てぞ候ける。(原拠本 p. 85)
- 1' その上かの忠盛の郎等もとは一門でござった家貞といふ薄浅葱の狩衣の下に萌黄緋の鎧を着て、弦袋を付け、太刀を脇挟うで、殿上の小庭にちやうどかしこまっていた。(天草版 p. 5)
- 2 資材雑具を追捕し、其奴を搦とて、六波羅へゐてまいる。(原拠本 p. 91)
- 2' 財宝、所帯道具までもこっと奪い取って、あまっさえ平家をそしたやつをば搦めとて、六波羅へひいて参った。(天草版 p. 12)
- 3 大炊御門の猪熊にて、殿下の御出にはなづきにまゐりあふ。(原拠本 p. 117)
- 3' 道で関白殿の御参内あるに、鼻つきにひたと入りあわれたところで、(天草版 p. 14)
- 4 「いかさまにも御声のいづうべき候」とさゝやいてひきふせ奉れば、(原拠本 p. 158)
- 4' 何とやうになりともを声をそっといだけさせられいとささやいて引き伏せ奉れば、(天草版 p. 29)
- 5 北山の邊雲林院へぞおはしける。(原拠本 p. 162)
- 5' やうやうとして雲林院とゆう所へ落ちついて、(天草版 p. 34)
- 6 長月廿日比にぞ、鬼界の嶋には着にける。(原拠本 p. 213)
- 6' 九月の二十日ごろにやうやうと鬼界が島には着いてござる。(天草版 p. 73)
- 7 今、ミヨ、マイランスルソト、宣モハテネハ参リタリ。(原拠本 p. 263)
- 7' 今見よ参らうぞと言わるる言葉もまだ乾ぬうちに、ひよっとそこへ参つたれば、(天草版 p. 120)
- 8 宮ノ御方ニハ、大矢ノ俊長、渡部ノ清進ガ射ケル矢ソ、物ニモ強ク、透リケル、(原拠本 p. 276)
- 8' 宮のおん方には大矢の俊長、五智院の但馬などが

射る矢は鎧も、盾も堪らずくっと抜けた。

(天草版 p. 126)

- 9 御悩ノ時ニ臨ンテ、鳴絃スルコト三度、其後、御前ノ方ヲ睨ヘテ、(原拠本 p. 296)
- 9' 御悩の時に臨うで、弦音を三度ちやうちやうどして、その後お前の方を睨うで：(天草版 p. 141)
- 10 人ノ馬ニハ我レ乗り、我馬ヲハ人ニ乗レ、或ハ、羈タル馬ニ乗テ馳レハ、株ヲ回コト限ナシ、(原拠本 p. 353)
- 10' 人の馬にはわれ乗り、わが馬をば人に乗られ、つないだ馬に乗って走らかせば、ぐるりぐるりと株を回することは限りがなかった。(天草版 p. 153)
- 11 二万騎入り替テ、時ヲ作り、ヲメイテカリ、(原拠本 p. 432)
- 11' 二万余騎を入れ替へて、関をどっと作って喚いてかかったれば、(天草版 p. 168)
- 12 又、涙ニソ咽ケル。(原拠本 p. 436)
- 12' また涙をはらはらと流いたれば：(天草版 p. 172)
- 13 御布施ハ、先帝ノ御直衣トカヤ、上人賜テ、(原拠本 p. 677)
- 13' お布施は先帝の御衣とやらであったを上人泣く泣く賜はって、(天草版 p. 352)

2. 2 程度副詞

原拠本『平家物語』には見られず、『天草版平家物語』の同一箇所において添加される程度副詞は4語(いかにも(4)、もってのほか(1)、近ごろ(1)、やや(1))である。この他、量の副詞が2語(みな(3)、いろいろ(1))、時の副詞が8語(すなはち(3)、やがて(4)、たちまち(1)、をりふし(1)、つひに(4)、はや(3)、いまさら(2)、しばらく(2))みられる。以下に実際の例を挙げる。

- 14 参内のはじめより、大なる鞘巻を用意して、束帯のしたにしどけなげにさし、(天草版 p. 85)
- 14' それといふは、参内のはじめからをうきな鞘巻を用意して、束帯の下にいかにもしどけなげに差いて、(天草版 p. 5)
- 15 入道相國の御むすめ建礼門院、其比は未中宮と聞えさせ給しが、御悩とて、(原拠本 p. 209)
- 15' 後に立たせられた清盛の娘中宮御懐妊あつて、もってのほか悩ませられたによって(天草版 p. 71)
- 16 誠に汝が是まで尋来たる心ざしの程こそ神妙なれ。(原拠本 p. 234)
- 16' まことに汝がこれまで尋ね来る志のほどは、ちかごろ神妙な。(天草版 p. 86)
- 17 入道「いかにかにかに」とあきれ給ふ。おとゞ涙をおさへて申されけるは、(原拠本 p. 171)

- 17' 重盛いかにかにとかきれるれば、やゝあつて重盛涙を抑へて申さるるわ：(天草版 p .45)
- 18 コハイカニトソ騒レケル、(原拠本 p .388)
- 18' これはなんとせうぞと言うて、皆騒がれたれば、(天草版 p .157)
- 19 様々ノ興有リシ事トモ、(原拠本 p .477)
- 19' いろいろさまざまに遊びたわむれられたことどもを(天草版 p .229)
- 20 上皇大きに驚きおぼしめし、忠盛をめてして御尋あり。(原拠本 p .87)
- 20' 帝王も大きにをどろかせられて、すなはち忠盛を召して、このことはなんとと、を尋ねあつたれば、(天草版 p .8)
- 21 「御ちに参りはじめさぶらひて、君をちのなかよりいだきあげまいらせ、(原拠本 p .165)
- 21' 生まれをちさせらるれば、やがて君をいだきあげまいらせ、(天草版 p .37)
- 22 けふはまぎるゝ事いできたり。(原拠本 p .102)
- 22' 今日はをりふしまぎるることがある：(天草版 p .101)
- 23 カケヤフリ\、行ホトニ、主従五騎ニソ成ニケル。(原拠本 p .496)
- 23' 駆け破り駆け破りして通らるるほどに、遂には主従五騎になられた。(天草版 p .245)
- 24 今ハ、宮ハ、遥ニノビサセ玉ヒヌラント、(原拠本 p .286)
- 24' 今は早宮も遥かに延びさせられうずると(天草版 p .134)
- 25 髻り付キ乍ラ、受戒サセ玉ウヘウヤ候ラント、申レケレハ、(原拠本 p .578)
- 25' 髻切つて、たちまち受戒させられいかしと申されたれば：(天草版 p .294)
- 26 おぼつかかなう思ひまいらするに、いかなる御目にかあはせ給はむずらむ」となく。(原拠本 p .165)
- 26' おぼつかかなう思いまらしたに、いまさらいかなるをん目にかあわせられうずらうと言うて、泣くところで、(天草版 p .37)
- 27 朝敵と成てはいかにくゆ共益有まじ。世をしづめん程、法皇を鳥羽の北殿へうつし奉るか、(原拠本 p .170)
- 27' 朝敵となつては、いかに悔ゆるとも、益あるまじい。しばらく世をしづみようほど法皇を鳥羽の北殿へ移し奉るか、(天草版 p .43)
2. 3 モダリティの副詞
原拠本『平家物語』には見られず、『天草版平家物語』の同一箇所において添加されるモダリティの副詞は次の25語(いざ(1)、さても(3)、あはれ(1)、いやいや(1)、すこしも(1)、をよそ(1)、さだめて(2)、さこそ(1)、もし(3)、とかく(1)、さすがに(1)、なかなか(2)、なをなを(1)、さながら(1)、さらに(1)、ゆめにも(1)、まったく(1)、さほど(1)、え(1)、たとい(2)、なほ(1)、ただ(10)、ことに(2)、まことに(3)、あまりのことに(1))である。以下、実際の例を挙げる。
- 28 あそびもののならひ、なにかくるしかるべき。推参して見む」とて、(原拠本 p .96)
- 28' 遊び者の習いなれば、さだめて苦しゅうもあるまい；いざ推参してみようと言うて、(天草版 p .94)
- 29 王位中将、快カリケル善智識カナト悦テ、(原拠本 p .578)
- 29' 重衡さてもよい善智識かなと喜うて、(天草版 p .295)
- 30 「人の形見には手跡に過たる物ぞなき。(原拠本 p .227)
- 30' あはれ人の形見には手跡に過ぎたものはない。(天草版 p .78)
- 31 有ヘカラス、改ムヘカラストテ、(原拠本 p .611)
- 31' いやいや改めなと(天草版 p .318)
- 32 勅撰ノ事ハ、人ハ知ラス、愚身カ承ニ於テハ、御疑有ヘカラスト、(原拠本 p .456)
- 32' もし撰集のことがござるにをいては、余の人は知らず、拙者に仰せつけらるるならば、少しも疑はせらるるなど、(天草版 p .182)
- 33 大納言一人にもかぎらず、警を蒙る輩おほかりけり。(原拠本 p .182)
- 33' およそは成親卿一人にもかぎらず、いましめを蒙つた輩が多かつたを(天草版 p .56)
- 34 典楽頭定成ガ、一年セ、御療治ノ為ニ召レタリシカハ、ソレゾ見シリマイラセントテ、(原拠本 p .288)
- 34' 定成といふ医師が一年御療治のために召されたれば、定めてそれが見知りませうずと言うて、(天草版 p .136)
- 35 草の陰にても余波おしうやおもはれけむ。(原拠本 p .229)
- 35' 草のかげでもさこそ名残をしゅう思われつらう：(天草版 p .79)
- 36 われ餓鬼道に尋来るか」と思ふ程に、(原拠本 p .234)
- 36' もし餓鬼道にたづねてきたかと思うほどに、(天草版 p .86)
- 37 圓滿院ノ大輔員覚ガ申ケルハ、僉議端多シ、

- (原拠本 p.270)
- 37' またあるものが申したは：とかく僉議が多うて悪い：(天草版 p.122)
- 38' あのすがたに腹巻をきて向はん事、おもばゆうはづかしうや思はれけん、(原拠本 p.171)
- 38' あの姿に腹巻を着て、向わうずること、さすがにをものはゆう恥づかしゅう思われたか、
(天草版 p.44)
- 39' 御命タニ扶カリ玉ハハ、聖ノ御房ノ御俣トソ申ケル、(原拠本 p.753)
- 39' なかなかを命さえ助からせられれば、聖の御房のおままと申した。(天草版 p.387)
- 40' 諸共にめしをかれんだにも、心うふさぶらふべきに、まして祇王ごぜんを出させ給ひて、わらはを一人めしをかれなば、ぎわうごぜんの心のうち、はづかしうさぶらふべし。(原拠本 p.98)
- 40' もろともに召し置かれうさえかたはらいたうござらうずるに、祇王は出されて、わらは一人をとどめをかせられれば、なほなほ迷惑に存じようず：
(天草版 p.97)
- 41' 世のあまねく仰げる事、ふる雨の国土をうるほすに同じ。(原拠本 p.90)
- 41' また世のあまねく仰ぎ敬うことは、さながら降る雨の国土を潤すやうにござった。(天草版 p.11)
- 42' 其恥をたすけむが為に、忠盛にしられずして儉か参候の条、力及ばざる次第也。(原拠本 p.87)
- 42' その恥を助けうずるために、忠盛に知らせませいで、密かに参ってござれば、さらに力に及ばぬ儀でござる：(天草版 p.8)
- 43' 忠盛が咎にあらず」とて、還て叡感にあづかしうへは、敢て罪科の沙汰もなかりけり。
(原拠本 p.88)
- 43' 忠盛が咎ではないぞとをうせられ、もつてのほか叡感なされたれば、罪科などの沙汰はゆめにもござなかった。(天草版 p.9)
- 44' かやうにしたしく成て候へばと申とや、おぼしめされ候らん。其儀では候はず。(原拠本 p.160)
- 44' その縁に引かれてかう申すとをばし召さるるか？
まったくその儀ではござない、(天草版 p.32)
- 45' いまだ遠からぬふねなれ共、(原拠本 p.216)
- 45' さほどまだ遠ざからぬ船なれども、(天草版 p.76)
- 46' 十四五までは出仕もし給はず。(原拠本 p.155)
- 46' 十四五までは出仕もえ召されず、(天草版 p.26)
- 47' 何としても命は大切の事なれば、今度こそもれさせ給ふ共、つゐにはなどか赦免なうて候べき」と
(原拠本 p.215)
- 47' いのちはいかにも大切なことなれば、たといこの

- 瀬にこそもれさせらるるとも、終にはなぜに赦免なうてあらうずるかと、(天草版 p.75)
- 48' 上皇御感のあまりに内の昇殿をゆるさる。
(原拠本 p.84)
- 48' 鳥羽の院なほ御感の余りに内の昇殿を許されたに
よつて、(天草版 p.4)
- 49' 法皇はうしろを遥に御覧じをくらせ給ひて、「末代こそ心うけれ。(原拠本 p.164)
- 49' 法皇はうしろをはるかに御覧じをくられてただ末代こそ心憂けれ、(天草版 p.36)
- 50' 正二位の大納言にあがて、当時君無双の御いとおしみなり。(原拠本 p.160)
- 50' 正二位の大納言まであがられ、ことに当時君の御寵愛も並びもないに、(天草版 p.31)
- 51' 風ニマカセ、塩ニ引レテ、焉クトモナク、揺レ行クコソ悲ケレ。(原拠本 p.656)
- 51' 風にまかせ、潮に引かれて、いづくともなう、揺られゆかれたはまことにいたはしい儀ぢや。
(天草版 p.341)
- 52' 其身既ニ朝敵ト成シ上ハ、子細ニ及ハストハ云ヒナカラ、口チ惜シカリシ事トモナリ
(原拠本 p.457)
- 52' その身すでに朝敵となられたうえは、子細には及ばねども、これほどの作者を読人知らずと書かれたは、まことにその身にとっては口惜しいこと
でござる。(天草版 p.183)
- 53' 衣文のかきやう、烏帽子のためやうよりはじめて、何事も六波羅様といひて(ン)げれば、一天四海に人皆これをまなぶ。(原拠本 p.91)
- 53' あまりのことに衣文のかきやう、烏帽子のためやうまでも六波羅やうといへば、一天四海の人々皆これを学ぶほどにござった。(天草版 p.11)

3 『天草版平家物語』において添加される副詞の構文的特徴

前節では、原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』を比較し、原拠本『平家物語』に現れず、『天草版平家物語』の同一箇所において新たに添加される副詞の例を挙げた。これらの例は、異なり語数51、延べ語数119を数える¹⁰。本節ではこれらの例をふまえ、情態、程度、モダリティの三分類に即して、『天草版平家物語』における副詞の構文的特徴について分析していく。

3.1 情態副詞の構文的特徴

情態副詞については「やうやうと」を除いていずれもその例は1例である。しかも、その多くは現代語へ引

き継がれていないことから、個別性が高く、一過性の語であることが窺われる。

また、その機能については、例えば、用例1では「殿上の小庭に畏まっている」様子が「ちゃうど」である、用例3では「はなづきにまゐりあふ」様子が（より具体的に言うと）「ひたと」である、用例5、6では「落ちつく」「着く」様子が「ようよう」である、といったように、いずれも動作、行為をより具体的かつ具象化することにより、動作の限定という点からみれば、形容詞に連続するものである。

中世語の特質は、小林(1994)によれば、

- ・事態を的確に把握する表現
- ・心情をストレートに表わせる表現

にあるという。従って、『天草版平家物語』において添加される情態副詞は、事態をよりの確に、具体化させるといった機能を有しており、これは古代語から近代語へという流れの一つに位置付けられるものである。

3. 2 程度副詞の構文的特徴

『天草版平家物語』において添加される程度副詞は、「いかにも」「もつてのほか」「近ごろ」の三語である。これらはいずれもその属性の程度の甚大さを示す機能を有する。この語群の代表的なものとしては、中古語の「いと」や現代語の「とても」などが挙げられる。語に語彙的意味と機能的意味の両面を認めるならば、この語群の語はその比重の軽重によって、形容詞的性格の強いものからモダリティ副詞の性格の強いものまで程度の差を認めることができるものである¹¹。この点では、中古の「いと」や現代語の「とても」などは、もっぱらその程度が甚大であることのみを示す（機能的意味が強い）、いわゆる文法化された語とすることができる。しかしながら、通時的には、「いと」「とても」共にその起源は話し手の感情に基づいた語であったことが明らかとなっており、それが広く一般的に用いられるにつれ、その語彙的意味は希薄になり、機能語として言語体系の中に組み込まれていったと考えられる。そして、これはまた語の一般的な変遷の過程である。

翻って、『天草版平家物語』において新たに添加される程度副詞をみると、「いかにも」「もつてのほか」「近ごろ」といったようにいずれも話し手の評価、心情が現れたモダリティ性の高い語であることが分かる。

引き続き、機能的意味の強い語も使われていることを考慮すると、『天草版平家物語』における程度副詞についてはこの中でもモダリティ性の高いものが拡充されたと考えられる。中でも、「いかにも」については、古代語においては程度副詞としての例は僅少であり、また、「いかにも」のかたちで応答詞としても用いられ

ることからも、感動詞に隣接した極めてモダリティ性の高い語であったと推察される。ところが、『天草版平家物語』においては、上述のように新たに添加される例が見られる他、原拠本『平家物語』の「いと」との関連において、

- 54 渠ノ有ケルヲ、宮ノ、^{イト}最物カノウ、ザツト超サセ玉ヒケレハ、(原拠本 p.250)
- 54' 溝のあつたを宮のいかにも軽うざつと越えさせられたれば、(天草版 p.109)

のように、これと交替する例が見られるのである。後述する「まことに」の例からも窺い知ることができるが、『天草版平家物語』における極度・高度を示す程度副詞は、機能的意味の強い語よりもモダリティ性の高い語が用いられる傾向にあることが指摘できる。

この他、時の副詞「すなはち」「やがて」「たちまち」「をりふし」「つひに」「はや」「いまさら」「しばらく」など新たに添加される例が少なからず見られる。これらは、時間的な論理関係を明らかにするという点で、接続詞に近接するものである。本稿の調査では、原拠本『平家物語』に見られず、『天草版平家物語』において新たに添加される接続詞について、異なり語数16、延べ語数60の例を確認した¹²。文と文との間の論理性を明示するという構文的観点からすると、これら時の副詞の例は日本語の論理性という点において重要な意味を持つと考えられる。

3. 3 モダリティの副詞の構文的特徴

『天草版平家物語』において添加されるモダリティの副詞について概観すると、まず、情態副詞、程度副詞と比較して、異なり語数、延べ語数ともかなり多いことが分かる。呼応に関与するいわゆる陳述副詞のみならず、話し手の判断、評価、心情が現れた語が原拠本『平家物語』には見られない箇所、『天草版平家物語』では添加され表現されている。しかも、用いられるモダリティ(叙法)は多様であって、感嘆文(「いざ」「さても」「あはれ」)、命令(禁止)文(「いやいや」「すこしも」)、判断文(「およそ」「さだめて」「さこそ」「とかく」「もし」「さすがに」「なかなか」「なほなほ」「さながら」)、みとめ方に関するもの(否定文)(「さらに」「ゆめにも」「まったく」「さほど」「え」)、仮定文(「たとひ」)、さらに程度性を帯びた取り立て文(「なほ」「ただ」「ことに」)、註釈・評価に関するもの(「まことに」「あまりのことに」)など多様なレベルのモダリティに関与する。

この中で、モダリティ(叙法)の転換に関わるのは、「いやいや」「すこしも」といった命令(禁止)文に添

加された副詞である。これらは、「決して」「絶対に」と解釈されるものであるが、原拠本『平家物語』では「べからず」によって、文脈、解釈上の禁止を示していたものが、『天草版平家物語』においては副詞を中心とした命令（禁止）文型として（いわば明確な）命令のモダリティを形成している。即ち、これは助動詞から副詞を中心とした命令モダリティへの転換である。

また、判断系の語には蓋然性の高さを示すものがみられる。例えば、用例37では、「餓鬼道に尋ねてきた」ことの蓋然性の低さを「もし」（ここでは「もしかしたら、ひよっとしたら」と解釈される）によって、明示している。用例34、35も同様である。この他、用例37～40は、命題に対する話し手の判断、評価が明示されたものと解釈される。この中には、例えば、用例37のように原拠本『平家物語』では単に命題「僉議が多い」ことのみが表現されていたものに「とかく」が添加され「とかく～悪い」といった判断文に転換された例や、用例40のように助動詞「べし」から副詞による判断文へ転換がなされた例も認められる。これらも、副詞によってモダリティの転換がなされた例である。

また、モダリティに関連して、最も注目すべきは「まことに」である。『天草版平家物語』において新たに添加される「まことに」は用例数も多く、『天草版平家物語』において重要な副詞であったことが推察されるが、これら『天草版平家物語』において添加される「まことに」については、原拠本『平家物語』との比較において二つに大別される。即ち、原拠本『平家物語』の係り結び文と交替するもの¹³（用例51）と、係り結びには直接関与しないもの（用例52）である。

用例51など原拠本『平家物語』の係り結び文と交替する副詞「まことに」の例は16例見られる。いずれも「こそ」「ぞ」による強調の係り結び文と交替するものであって、強調の係り結びの有する感嘆性を「まことに～ちゃ¹⁴」の形式で代替している。

古代語における係り結び文とは混沌とした複合的意味を担った構文形式であったと言われる。この複合的意味の一端（強調の機能、感嘆性）が「まことに」によって補われ（代替され）、近代語へと推移していったと考えられる。これは、統語論的喚体と言われる、未分化で混沌とした係り結び文から、主観性が構文上に現れた（形式として表現された）構文への転換、即ち、副詞を一方の軸とするモダリティ形式への変遷である。

これとは別に「まことに」が添加される例が少なからず見られるが、これらの多くは、一つの巻やある話題の最後に出現することが多く、その巻や話題に対しての評価や評語の中で用いられるものである。この点からも話し手の主観性が強く現れる語であるとみるこ

とができる。

ところで、先に「いかにも」はモダリティ性の高い程度副詞であると述べた。『天草版平家物語』における「まことに」についても、形容詞（形容動詞）の直前に位置し、一種の程度副詞のように用いられるものが多い¹⁵。この意味で、「いかにも」は程度副詞、「まことに」はモダリティの副詞と区分したものの、両者は連続していると考えられる。『天草版平家物語』では「いと」は僅かに4例しか見られないことから、『天草版平家物語』ではモダリティ性の高い程度副詞（程度を限定する機能を持つ副詞）のほうが数的にも優位であったことが知られる。

この他、話し手のみとめ方（肯定文／否定文）に関するもの（用例42～45）があり、ここでは、否定文について話し手の程度（全く、それほど）がみとめ方のモダリティ成分として構文上に明確に形式化されている。

以上、『天草版平家物語』において新たに添加されるモダリティの副詞の特徴について概観したが、前述したように多様なモダリティ成分に関与することが知られた。本稿で挙げた『天草版平家物語』において新たに添加される副詞の中でも、モダリティの副詞の例が異なり語数、延べ語数とも最も多く、『天草版平家物語』における副詞表現の発達は、即ち、モダリティの副詞を中心とするものであると考えられる。このことは、程度副詞に挙げた「いかにも」「もつてのほか」「近ごろ」がモダリティ性を帯びた程度副詞であることにも合致するものである。

4 結び—古代語から近代語への流れの中で—

以上、原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』の比較対照を通して、『天草版平家物語』において新たに添加される副詞について記述し、その位置付けを行なった。本稿の第一の目的である、新たに添加される副詞の実例の記述については一定の成果をあげることができたと考えられる。『天草版平家物語』において新たに添加される副詞個々の構文的機能、歴史的変遷については改めて別稿にて言及することとするが、『天草版平家物語』における副詞に関連して、本稿で得た結論は次の五つに纏めることができる。

- ①『天草版平家物語』において新たに添加される副詞は、情態副詞、程度副詞、モダリティの副詞の多岐に亘る。
- ②中でも、モダリティの副詞が異なり語数、延べ語数ともに多数を占める。

③情態副詞が添加される例では、その動作、状態がより具体化、具象化される。これは、事態を的確に把握する表現という近代語の要請に従うものである。

④程度副詞については、モダリティ性の高い語が添加される傾向にある。これは、モダリティの副詞が添加される例が多いことにも符合する。時の副詞はその性格上、接続詞に近接する。これは、より論理的にという近代語の要請に従うものである。

⑤新たに添加されるモダリティの副詞は、多様なモダリティ成分に関与するものである。中には、助動詞を中心にしたモダリティから副詞を中心にしたモダリティへと転換されるものも見られる。これは、心情をストレートに表現するといった近代語の要請に従うものである。

『天草版平家物語』における副詞については、大きく二つの機能が考えられる。一つは、より具体的、具象的に動作、状態を的確に表現するというものであり、もう一つは、より話し手の心情をストレートに表現するというものである。本稿で示した『天草版平家物語』において新たに添加される副詞もこの二つの方向性に従うものであり、これを拡充するものであったとみることができる。

本稿で得た結論は、大局的には、日本語が古代語から近代語へと推移する過程における、副詞を一つの軸としたモダリティ体系の成立、発達の流れの中に位置付けることができる。

【参考文献】

- 大野晋 (1993) 『係り結びの研究』 岩波書店
 清瀬良一 (1968) 「天草版平家物語における口訳語の存立状態」『国語学』74、pp.39-51
 清瀬良一 (1973) 「副詞から見た天草版平家物語本文の特色」『国文学攷』61、pp.1-10
 清瀬良一 (1982) 『天草版平家物語の基礎的研究』 溪木社
 工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』 明治書院
 小林千草 (1994) 『中世のことばと資料』 武蔵野書院
 土井忠生 (1934) 『近古の国語』『国語科学講座V 国語史学』 明治書院
 中右実 (1980) 「文副詞の比較」『日英比較講座 第2巻 文法』 大修館書店
 森重敏 (1958) 「係結」『続日本文法講座I』 明治書院
 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館
 渡辺実 (1971) 『国語構文論』 塙書房

中川祐治 (1999) 「極度・高度を示す程度副詞と係り結びの交替」『国語学会平成11年度秋大会 要旨集』、pp.136-143

中川祐治 (2000) 「古代語における極度・高度を示す程度副詞の機能と体系について」『国文学攷』166、pp.1-12

中川祐治 (2001) 「中世末期における指定辞「ぢゃ」の構文的機能について」『国文学攷』169、pp.17-31

【注】

¹ 原拠本『平家物語』については、清瀬良一 (1982) に従い、『天草版平家物語』107頁9行までは『覚一本平家物語』を用い、それ以後は『百二十句本平家物語』を用いるものとする。また、テキストとして、『天草版平家物語』は、近藤政美・池村奈代美・濱千代いずみ編『天草版平家物語 語彙用例総索引(1)影印・翻字篇』を、『覚一本平家物語』は『日本古典文学大系』を、『百二十句本平家物語』は、慶應義塾大学付属研究所斯道文庫編『百二十句本平家物語』(欠巻の巻八については『新潮社日本古典集成』を参考にする)をそれぞれ用いるものとし、『覚一本平家物語』は漢字平仮名混じり文で、『百二十句本平家物語』は漢字片仮名混じり文で表記する。

² 森重 (1958)、による。

³ 中右 (1980) による。そこでは、このモダリティの副詞について命題の外において機能する副詞、命題外副詞として捉えられている。

⁴ これら呼応に制限されない副詞については、既に、渡辺 (1971) などに指摘がある。そこでは、これらの副詞を一括して「誘導副詞」としている。

⁵ 中川 (2000) において、古代語の極度・高度を示す程度副詞を取り上げ、これらの語群には、最も形容詞的性格を有するものからモダリティ的性格を有する語まで含まれることを指摘し、同一構文においてこれらの語が連続することを明らかにした。

⁶ 工藤 (1983) に同様の指摘がある。また、歴史的にも、情態副詞からモダリティの副詞へと転換した語がみられる。

⁷ 同様の指摘には、清瀬 (1968) がある。清瀬 (1973) の論考は、さらにこれを補強し、裏付けるものである。

⁸ ここでは、「ちゃうど」「ひよっと」「ひたと」「ぐるりぐるりと」「くっと」「まっくろに」「むさと」「まだ」「いまに」「やうやうと」「やうやうとして」「連々」「再々」「こっと」「そっと」「ちかごろ」「なほなほ」「さほど」「ま」「なぜに」「なんとぞ」「一円」「構えて」「さながら」の24語が取り上げられている。

⁹ 他にも、清瀬 (1973) では、斯道文庫編『百二十句本

『天草版平家物語』における副詞の位置

平家物語』の欠巻の巻第八に竹柏園本を以って充てており、そこにしか顕れない6語（連々、再々、なぜに、なんとぞ、一円、構えて）をも取り上げている。本稿では資料性の厳密さをはかるため、巻第八は『新潮社日本古典集成』を参考にすることに留め、直接取り上げることはしないものとする。

¹⁰ ここで一つ考えておかなければならないのはこれらが偶然に挿入されたものではないかという点である。事実、『天草版平家物語』において添加された副詞は、原拠本『平家物語』においても既に用例の見られるものである。しかしながら、原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』を比較して、『天草版平家物語』の方が本文上の省略が多く、かなりの量が削減されているにも関わらず、延べ語数119という多数の副詞が添加されていること、口語テキストのための「世話に和らげたる平家の物語」であるという明確な編集方針などに鑑みて、大部分は明確な意図をもって新たに添加されたものと考えられる。

¹¹ 中川（2000）では、この観点から中古における極度・高度を示す程度副詞について体系化を試みた。

¹² 本稿の調査で確認できた接続詞の例は、「また(18)」「さうあって(2)」「それによって(4)」「あまつさえ(1)」「まづ(5)」「さて(16)」「さては(2)」「しかれども(1)」「さりながら(3)」「さうあるところへ(1)」「そこで(2)」「さうあるところに(1)」「そののちに(1)」「そのうえ(1)」「さうして(1)」「さうして後(1)」である。

¹³ 中川（1999）参照。

¹⁴ この「まことに～ちゃ」の形式によって感嘆性が現れた構文となることについては、中川（2001）を参照のこと。

¹⁵ 本稿の調査では「まことに」全78例の内、形容詞（形容動詞）の直前に置かれその程度の限定に関わっていると考えられるものは38例である。

（指導教官：沼本克明）